近世相模国大山寺における十二坊と御師の建築について

EARLY-MODERN ARCHITECTURE FOR JUNI-BO AND OSHI IN OYAMA-DERA TEMPLE
OF SAGAMI-NO-KUNI PROVINCE山 岸 吉 弘^{*1}

Yoshihiro YAMAGISHI

This paper aimed to recover the outline and analyze the characteristics of the mansions of Juni-bo (twelve branch temples) in Oyama-dera temple precinct in Kanagawa province, and the houses of Oshi priests in its temple town by collecting and comprehending relative historical materials. It focused on the end of Edo and the beginning of Meiji periods to consider from the perspective of architectural history. Consequently, the mansions and the houses had their own characteristics along with interactive elements. The mansions held Buddhist services, whereas the houses accommodated Danka pilgrims, both functions being shared in both buildings.

Keywords : the pre-modern period, sagami-no-kuni province, mansions, houses

近世, 相模国, 屋敷, 住宅

1. 相州大山の屋敷と住宅

神奈川県中西部に広がる丹沢山地の東端に位置する大山は、別名に阿夫利山とも称され、古くから信仰の対象ともなった。山内には大山寺が境内を構え、山頂には阿夫利神社が石尊大権現を祀り、いずれの創建や起源は古代にまで遡るといえる。下って近世に入り、幕府の庇護の下で伽藍が再興され、別当の八大坊を中心に十二坊からなる自治のための運営機関が組織された¹⁾。また、同時に大山を聖域と定める結界が張られ、在来の修験者は下山して「御師」となり、参道に居住することで門前町が形成された²⁾。江戸時代の寺内や門前の様相は、家康の主導によるこれら一連の「山内改革」を出発点として幕末まで展開することになる(図1)。

江戸時代における大山の最大の特徴は、御師と檀家からなる「大山参り」と呼ばれる現象が江戸を中心に関東一円で流行したことである³⁾。盛時には100万人ともいわれる人々が大山を信仰し、各地で講が結成され代参を立てては大山寺を参詣している⁴⁾。それら講中は「檀家」と呼ばれ、特定の御師に引率されて登拝する(これを檀家の「坊入り」という)。また、御師の活動の一つに、関東一円に散在する檀家を順次に訪れ、配札や祈祷などを行った。大山と地域を繋ぐ経路である大山路を開発し、名主など有力者の協力を得ては、「定宿」と呼ばれる檀家宅を拠点に定めて巡回した(これを御師の「檀回り」という)。このように、御師と檀家の双方が広範囲を移動することによって機能する動的な社会構造が成立していた⁵⁾。御師は、寺院と檀家を取り持ち媒介する役割を担う。大山寺の配下にある神職者で、聖域と俗界の中間に存在し、最盛期にはおよそ百六十五軒の御師が、門前町に居宅を構え活動していた⁶⁾。

本稿は、大山寺の寺内及び門前における十二坊の屋敷や御師の住

宅について、関連する史料の収集と読解を通して建物の概要を復元し、特徴を分析することを目的とする⁷⁾。「大山詣り」が隆盛を迎えた江戸時代後期以後、幕末・明治期に焦点を当て、建築史的な考察を試みる⁸⁾。

収集した史料から、特に屋敷や住宅の形態を直接的に知ることのできる図面類を選定し、建物の具体像を把握する。それらの多くは平面を描いた指図であり、建物の構成を知ることができる。また、建築する過程で必要になる設計・積算・施工などの文書も残されており、建物を復元する上での手掛かりとなる。屋敷や住宅の概要を整理した上で、特徴的な要素を抽出・分析する⁹⁾。

2. 屋敷と住宅の概要

考察の対象として、「手中家資料」と「高尾家文書」から合計8件の屋敷や住宅を選定することができた¹⁰⁾。その内訳は、十二坊の筆頭にある別当の八大坊上屋敷(上寺)、十一坊である供僧の大覚坊客殿・中之院客殿・常円坊勝手・授得院勝手・広徳院庫裏、御師の高尾家住宅・成田家住宅である。以下、個別に指図の内容を確認する。

2-1. 八大坊

八大坊は大山寺の別当で、慶長の改革に際して山内の整理を家康に命じられて以来、寺院の中心的存在にあった。修法のための上屋敷(上寺)と経営のための下屋敷からなり、前者は山上の仁王門脇に、後者は山下の福永町に、それぞれ設けられた。その内、上屋敷を描いた二点の指図[1-A・1-B]が残されており、建物の概要を知ることができる(図2・3)。

指図[1-B]には、〈八大坊様上屋敷地割〉と表題されている。〈安政二年ノ三月より安政三年十一月迄二造作出来申候〉とあるこ

^{*1} 日本大学工学部 助教・博士(建築学)

Assist. Prof., College of Engineering, Nihon Univ., Dr.Arch.

Fig.1 Plot plan of the Oyama-dera temple precinct⁽²⁸⁾
図1 大山寺諸堂坊配置図

屋敷の構成は大まかに表向きと内向きに区別され、その中間に土間が位置している。当初、手前には＜八畳＞の部屋を田の字型に四つ配置する計画であったが、その後、二つの部屋の広さを十畳に改めている。四つの部屋の内、表に面した一つの十畳の部屋が＜玄関＞で、正面には＜大床＞を設ける。玄関の奥は＜仏壇＞を置く仏間となるが、玄関と仏間の境界は＜ハリツケ＞の壁が建てられており、直には接続していない。玄関から仏間までに至るには、途中にある二つの部屋をコの字に通ることになる。玄関の隣室は＜使者の間＞として設けられ、使者の間と仏間の間は更に一つの部屋で隔てられている。玄関と使者の間の境は＜シ＞として障子を立てるが、使者の間から仏間までの部屋の境には＜カラ＞として襖を用いる。仏間には仏壇の前が一部で板敷きのように描かれているが、或いは護摩壇など雛壇状の仏具が置かれていたとも考えられる。

指図〔1-A〕では、隣接する玄関や仏間は共に八畳であり、同じ柱筋に取り付く車寄せも二間の幅として計画されているが、線を引き足して修正し、全体的に拡張している。その結果、指図〔1-B〕に描かれるように玄関も仏間も十畳に広げられ、車寄せも二間半となった。

奥は主に四畳から八畳までの広さを有する部屋により構成されており、例えば最奥に並ぶ二つの部屋は＜トコ・タナ＞の座敷飾りが設えられたり炉が切られたりする＜御居間＞や＜納戸部屋＞などで、住持など寺僧の生活の場として作られている。また、＜拾八畳＞の畳敷きに一畳ほどの大きさの囲炉裏が設けられた＜上台所＞が併設する。

はす向かいに位置する表向き部分と内向き部分の間には、大きな竈が設けられた土間の他に、＜八畳＞の＜下台所＞や＜六畳＞の＜内玄関＞が位置する。上台所に接する下台所には焚き口が三つの竈があり、障子で仕切られた十畳ほどの板敷きが隣接する。また、土間には＜流シ＞や＜水盤＞が置かれ、焚き口が二つの竈も作られる計画があった

とから、足掛け十九ヶ月の期間をかけて工事が行われたようである。指図〔1-A〕には、＜八大坊上寺地割扣＞と表題があり、同じく上屋敷（上寺）が描かれている。指図〔1-B〕と大きく代わるところはないが、指図〔1-A〕には間取りや寸法などを検討する記述があることから、製作年代の前後関係を推定することができる。

ようである。それら土間や台所には、玄関の脇にある内玄関から＜カラ＞の襖や＜スキト＞の杉戸を開けて入ることができる。

屋敷への出入り口として、＜玄関＞と＜内玄関＞の二種類の玄関が設けられている。玄関には唐破風をあげた車寄せが付き床を設け格式を重んじるが、内玄関にはない。また、玄関からは使者の間などの前室を経て仏間に至るように計画されているが、内玄関からは土間の脇を抜けて下台所へと続き奥の日常生活の場へと導く。このように、二つの玄関の差異は建物内へと引き込む動線にも現れている。

土間の端にある＜物置＞の前には、＜入口＞と＜出口＞が向かい合って設けられている。入口は内玄関の前を通過して土間に入るように作られている。出口の先には物置きの外側を廻るようにつられた通路があり、石垣の脇を下りてゆく階段がある。つまり、敷地の外へと続いているのだろう。入口から出口へ、人の流れが明確に意図されている。

2-2. 大覚坊

大覚院は十一坊の内の一つで、八大坊を中心とする寺内組織の一翼を担う供僧である。不動堂前の楼門に上る階段脇の路地を入った先に、大覚坊は屋敷を構えた。屋敷を描いた四点の指図〔2-A・B・C・D〕が残されている（図4・5・6・7）。

一つ目の指図〔2-A〕は、＜大山寺大覚坊住居絵図＞として敷地を含めた屋敷の全体が描かれている。指図と共に作成された＜大覚坊普請注文書＞には＜申九月＞と記されているおり、万延元年（1860）以前であることが分かる。二つ目の指図〔2-B〕には、＜大山寺大覚坊様御客殿地割＞として略図が描かれ、＜文久二戊四月吉日依り図之ヲ＞の日付と、＜但シ四拾三坪半外二便所ヶ所玄関別二積ル＞として建物の大きさ等が書き込まれる。三つ目の指図〔2-C〕には、同じく「大山寺大覚坊様御客殿地割」と表題され、大覚坊の屋敷が描かれる。＜文久二戊四月日＞の日付だけでなく、＜辰八月廿三日作事朱引分直ル＞とあるように6年後に改変を計画しており、＜棟梁手中明王太郎景元代控図 但シ御坊枚差上候＞の作成者が記される。四つ目の指図〔2-D〕には「大山寺大覚坊様地割」として、部分的ではあるけれども比較的詳細な指図が描かれている。範囲は指図〔2-C〕において朱の部分に該当し、おそらくは改変を検討したものである。

屋敷は大まかに手前と奥からなり、前者には＜下台所＞もしくは＜勝手＞のある内向き部分に、後者には＜須弥壇＞に＜宮殿＞もしくは＜本尊＞が置かれる表向き部分に、それぞれ区別される。手前の内向き部分は何れの指図をみてもおよそ変わるところはなく、＜大戸口＞を入れて直ぐの＜土間＞と＜拭板＞を敷く下台所（勝手）と＜イロリ＞を設けた＜惣二階作＞の＜大庫裏＞がある。土間や下台所と大庫裏の境には＜せうし＞など障子を立てるが、土間と下台所を隔てる装置はなく連続している。

奥は手前の部分に比べて多くの部屋から構成されており、指図ごとに修正が加えられ、複雑である。始めに描かれたであろう指図〔2-A〕によると、宮殿が祀られ＜コマダン＞を置く＜八畳敷＞を最深部として、入口となる＜式台＞から順次に＜玄関・取次間・次・書院＞と各部屋が続く。玄関の脇には＜小玄関＞があり、二つの異なる玄関が用意されている。次や小玄関に隣接して＜茶之間＞が設けられ、＜こしせうし＞もしくは＜フスマ＞により接続されるが、護摩壇のある八畳敷きとの境には＜（ハリツケ）カヘ＞で隔てられる。

Fig.2 Floor plan of the Hachidai-bo mansion²⁸⁾
図2 八大坊屋敷指図 [1-A]

指図 [2-B] では奥の部分に相違が見られ、本尊を祀る＜拝所＞を含め、＜上之間・次之間・三之間＞の四つの部屋を田の字型に並べている。拝所を最上位に、三之間を最下位に、空間の格式はコの字型に階層を形成している。その他、次之間に隣接して唐破風を上げた＜玄関＞から続く部屋や、＜床＞を設けた＜御居間＞がある。指図 [2-C] では、奥の部分を実線で記述し描画しており、指図 [2-B] の計画を修正している。本尊が置かれる＜護摩所＞や＜上段之間・二之間・茶之間＞の位置は変わらないが、三之間的部屋の名称を茶之間としている。また、玄関前の部屋を＜ハリツケ＞や＜フスマ＞で仕切り、或いは縁の部分に張り出して増設し、＜溜之間＞を含む三つの部屋を新たに設けている。つまり、指図 [2-B] から指図 [2-C] への変化は、三之間・次之間・上之間・拝所からなるコの字型を、溜之間・二之間・上段之間・護摩所からなるL字形へと構成を修正しているといえよう。コの字型では、出発点となる三之間が玄関などから遠くなって動線が複雑になる。指図 [2-D] では、＜二之間＞を前後に区切り、十畳と五畳の二つの部屋に分けている。更に、玄関の位置をずらして上段之間や二之間と揃え、部屋の並びを直線的に配置し直し、動線をより簡明にしている。

指図 [2-A] には周辺の様子も含めて記録されており、前面の路地が＜坂＞となっていることから分かる通り、敷地は傾斜地にある。そのため、左右には石垣が描かれる。上方は＜不動御堂の方＞であり、下方は＜坊中屋敷＞といふ寿徳院がある。また、坂を隔てた向かいの＜坊中屋敷＞や裏の＜坊中屋敷＞は、それぞれ橋本坊や中之院と考えられる。坂と敷地の境には＜御門＞が建てられ、玄関まで石畳を敷く。また、路地に接する建物の部分には＜戸二＞として戸を立てて、敷地の内外に出入りすることができるようになって

Fig.3 Floor plan of the Hachidai-bo mansion²⁸⁾
図3 八大坊屋敷屋敷 [1-B]

Fig.4 Floor plan of the Daikaku-bo mansion²⁸⁾
図4 大覚坊屋敷指図 [2-A]

Fig.5 Floor plan of the Daikaku-bo mansion²⁸⁾
 図5 大覚坊屋敷指図〔2-B〕

ている。

2-3. 中之院

中之院は供僧十一坊の内の一つで、大覚坊の裏手に屋敷を構える。中之院の屋敷を描いた三点の指図〔3-A・B・C〕が残されている（図8・9・10）。

一つ目の指図〔3-A〕には「照海様代中之院様地割」として、中之院の屋敷が描かれている。＜安政五午四月廿三日＞の日付の他に、＜手中明王太郎控 右之通り式枚出来壺枚之儀 御院主控＞とあり、大工用と施主用の2枚の指図が作成されたことが記されている。二つ目の指図〔3-B〕には「大山寺中之院様客殿地割御院主立合ニテ定」の表題が付き、「地坪メ四拾四坪六分但シ六畳ノ便所共外ニ御玄間ノ坪」の規模が明記される。また、＜文久二年戊ノ七月廿一日改＞から、施主である院主との相談の上で、4年前に計画した内容を修正するための指図であることが分かる。なお、＜棟梁手中明王太郎景元代作之此図別テ書御院主え壺枚差上置候＞とあるように、大工と施主一枚ずつ、計二枚の指図が作成されている。三つ目の指図〔3-C〕には「中之院様地絵図控」として中之院の屋敷ではあるが、他の指図のように屋敷全体を描くのではなく、仏間のある座敷が中心となっている。また、年代が不明であり、他の二つの指図との時間的な前後関係も明確でない。

屋敷の構成は大まかに手前と奥に区別され、中間には廊下を通し

Fig.6 Floor plan of the Daikaku-bo mansion²⁸⁾
 図6 大覚坊屋敷指図〔2-C〕

て両者を隔てる構成は、いずれの指図をみても変わらない。一方で、手前の部分は改変の前後で内容が大きく異なる。安政5年（1858）の指図〔3-A〕によると、手前には＜仏間＞を中心とする六つの部屋からなり、前後2列で長方形に整然と配置されている。前には＜拾畳＞が三つ並び、後ろには＜八畳・六畳・四畳＞が並び、三つの十畳の内、火灯窓が二つ付く部屋は＜茶之間＞であり、八畳は＜上檀＞として作られる。また、建物の西側を通り門を潜って四畳に至る＜中庭入口＞があるだけでなく、十畳の手前には板敷きを介して＜玄間＞と＜小玄間＞が設けられている。また、板敷きの突き当たりに＜六畳＞の部屋がある。玄間から入り、板敷き・十畳を経て仏間へと至る直線的な動線を想定することができる。

文久2年（1862）の指図〔2-B〕によると、六つの部屋からなる構成はそのままに玄間の位置を変えるなど、安政5年（1858）に立案した計画を変更している。かつて茶之間であった部屋の規模を十畳から＜拾五畳＞に拡張し、小玄間のあった場所に＜玄間＞を移動させている。従って、玄間から仏間への動線は、鍵の手に曲がることになる。また、玄間のあった場所には板塀を巡らし、冠木門を設置し、塀や門で囲い込まれた先にあったかつての六畳は、＜茶座敷＞となっている。

奥の部分は二つの指図で異ならず、＜大戸入口＞を入れて直ぐの部屋は＜炉・イロリ＞や竈を設ける＜勝手＞であり、更に内部に入って＜八畳＞の＜居間・照海様御居間＞や＜八畳＞の＜客間＞の他に、＜二畳＞の＜小僧部屋＞や＜納所部屋＞や＜奥部屋＞などが設けら

Fig.9 Floor plan of the Nakanoin mansion²⁸⁾
図9 中之院屋敷指図〔3-B〕

2-7. 高尾家

高尾家は御師であり、同家の屋敷を描いた二点の指図〔7-A・B〕は、「家作仕様積立帳」の中に含まれている(図14・15)。仕様を踏まえた費用を積算した文書で、表紙には「⁽¹⁸⁶⁴⁾文久四年甲子四月吉日」もしくは「⁽¹⁸⁶⁴⁾元治元年甲子四月吉日」の年月を記す。どちらも同じ内容の複製であり、「地割但し七拾坪余」の表題も付き、指図もおおよそ異ならないが、「<神殿>」の描き方のみ平面図もしくは立面図という違いがある。

建物は、「長縁」に囲われた畳敷き部分と「イロリ」を備えた土間・板敷き部分に区別することができる。前者は、更に二つの用途が想定され、一つは宗教的な行為のための場であり、一つは日常的な生活を送るための場である。宗教的な部分は、「トコ・タナ・書院」の座敷飾りを備えた「八畳」と続く二つの「八畳」の合計で三つの部屋である。日常的な部分は、「部家」とある「八畳」を含め「六畳」から「十式畳」までの広さからなる合計で四つの部屋である。部屋の広さを記述する文字の向きからも、それぞれの差異を理解することができる。「六畳」には「二階口」が位置しており、おそらくは宿泊者の滞在の場であった二階へ上がることができる。また、敷地内には独立した建物として神殿が建てられており、平面図や立面図から縁と接続していることや切妻平入りの三間社であることなどが分かる。後者は、おそらくは土間と板の間からなる作業空間であり、「イロリ」や竈が置かれる。土間には三つの開口部が設けられ、表から直接に入るものと門の内側の敷地内から入るものの

Fig.10 Floor plan of the Nakanoin mansion²⁸⁾
図10 中之院屋敷指図〔3-C〕

二つは「入口」であり、一つは「出口」である。

2-8. 成田家

成田家は御師であり、安政二年(1855)に同家の屋敷を手掛けた明王太郎が雑録した文書の中に、材料の寸法・数量の控えや金銭の授受の経過に加えて、簡単な指図〔8〕が含まれている(図16)。

建物は、「玄関」や「内玄関」が取り付け表向きの部分と、「入口」を入れて直ぐ「土間」となる内向きの部分と、大きく二つに区分される。玄関には唐破風を上げ大きな式台を張り、「七丈半」を経て「二十二丈半」へと至る。その先の縁には渡り廊下のようなものが接続し、恐らくは祈祷や祓を行うための神殿や祠が安置されているのだろう奥へと続いている。内玄関からは、表向きの「八畳」と内向きの「八丈」のどちらへも入ることができる。また、土間から入ると、左側には「二十四坪」の二階に上がる階段が、右側には竈を備えた台所が、正面には「フロ」や便所が、それぞれ用意されている。また、竈の脇には「出口」が設けられている。

3. 屋敷と住宅の特徴

個別に整理した屋敷や住宅の内容を踏まえ、始めに、十二坊の屋敷と御師の住宅の特徴的な要素をそれぞれ明確にさせる。その後、両者の類似点や相違点を検討する。

3-1. 十二坊の屋敷

表向きと内向きの区分

十二坊の屋敷に共通するのは、いずれも表向きと内向きの空間が明瞭に区別されていることである。大きく二つの部分から全体が構成されていることは、史料の表題に「客殿」や「勝手」などの名称が使用されていることから窺われる¹¹⁾。例えば、八大坊や中之院の屋敷は、表向きと内向きの部分を鍵の手に組み合わせており、それぞれが独立した二棟の建物のからなることが分かる。また、「玄関」と「(土間)入口」など表向きと内向きの空間に対応する出入り口が存在するだけでなく、両者の境界部分には三つ目の出入り口として

＜内玄関・小玄関・中庭入口＞などが設けられており、双方の内部に繋がり得る中間の領域と捉えることができる¹²⁾。

表向き空間の階層

表向きの空間は幾つかの座敷が集合して形成され、その内の一つが仏壇を置く仏間になっている。十二坊は勿論のこと、十一坊も護摩を焚いていたことは、大覚坊の屋敷にある＜コマダン＞からも明瞭である。檀家は御師の取り次ぎにより、十二坊から法要を受

Fig.11 Floor plan of the Joen-bo mansion²⁸⁾
図 11 常円坊屋敷指図 [4]

ける¹³⁾。目的や機能から、取次の間が出入口の近くに配置され、訪問者が最初に訪れる場所であることは当然といえる¹⁴⁾。仏間に至るまでに一部屋乃至数部屋を経ることは、空間に上位と下位の階層を演出するためであろう。例えば、大覚坊や中之院の屋敷には途中で溜の間がある。部屋の配置と名称から、おそらくは参詣者が建物の中に入り、まずは留まる場所であることが想定される。その目的や機能は、取次の間に似るものと考えられよう¹⁵⁾。八大坊の屋敷にみられる＜使者之間＞も同様である。十二坊の屋敷には、取次の間や溜の間などに相当する空間の必要性が認められる。

効率的に法要を行うために、檀家は玄関一溜の間・取次の間一次の間一上段の間一仏間を順次に移動していっただろう。動線の形態は、八大坊のコの字型や大覚坊のLの字型、中之院の鍵の字型及びIの字型などさまざまである。また、大覚坊や中之院では炉を備えた茶の間があり、人の流れは茶の間まで想定される。玄関から仏間までの動線上からはずされ、その近傍に用意されている¹⁶⁾。

内向き空間の構成

内向きの空間は、基本的には居室空間である居間と作業空間である土間や板敷きからなる。居間は住持等が日常を過ごす場所と考えられるが、決して閉ざされた場所ではな

Fig.12 Floor plan of the Jutokuin mansion²⁸⁾
図 12 授徳院屋敷指図 [5]

広徳院様庫裏
御住居絵図

明王太郎控

Fig.13 Floor plan of the Koutokuin mansion²⁸⁾
図 13 広徳院屋敷指図 [6]

かったようである。例えば、八大坊は居間（もしくはその付近）で供僧や役人に食事や酒を振る舞い、止宿もさせている¹⁷⁾。また、御

Fig.14 Floor plan of the Takao's house²⁸⁾
図 14 高尾家住宅指図 [7-A]

Fig.15 Floor plan of the Takao's house²⁸⁾
図 15 高尾家住宅指図 [7-B]

Fig.16 Floor plan of the Narita's house²⁸⁾
図 16 成田家住宅指図 [8]

師に限らず十二坊も檀家を所有していたことが知られ、多くの人数を一度に収容するような機能が計画されていた可能性もあるだろう¹⁸⁾。

土間や板敷きには、炊事をするための竈や流しを設け、炉を切り或いは炉櫃を置く。また、これら勝手において来客の対応をしていたと考えられ、相応に広い空間であることは共通する。檀家は土間を介して建物の内外に出入りしていたと考えられるが、大覚坊の小玄関は檀家の出入り口と捉えるのが自然であり、中之院の四つ目の出入り口として個別に設けられた〈中庭入口〉も檀家の利用が想定

される¹⁹⁾。

3-2. 御師の住宅

神殿の設置

御師の住宅には神殿が置かれ、神職である御師により祈禱などの神事が執り行われた。高尾家にも神殿が設けられており、建物とは別に建築されている²⁰⁾。指図には小規模な祠として描かれているが、仕様書には〈仮神殿五坪〉とも記されており、仮設によるとも考えられる²¹⁾。成田家にも神殿は設けられていたであろうが、位置は特定できない。仮に高尾家と同じと

するならば、縁に接続する渡り廊下の先にあると考えられ、指図から判断すると規模が大きい。

勝手の機能

御師が果たすべき役割の一つに、檀家等の参詣者に対する山内の案内が挙げられる。山開きの短期間に集中して登拝する人数は膨大で、各々の御師が所有する檀家も相当数に上り、例えば、村山家には天保2年(1831)の夏山の間に合計855名が滞在した(表1)²²⁾。中には〈昼通り〉として宿泊しない客もいたであろうが、多くは宿泊していったと考えられ、連泊する者もあった。また、同家の年中行事を記録した「村山年中行事」によると、大祭中に〈主人・内方・手代・料理人・下女・下男・飯炊〉の各人が仕事を分担し、主人や手代の役割から、参詣者が到着して出立するまでの大凡の行動が知れる²³⁾。特に、到着の段階で仕事が多く、まずは主人と手代で出迎え講中や姓名を記帳し、荷物や履き物に札を付け、諸々の祈願を受け付ける。また、坊入や札など料金の支払い、本社での祈禱の取り次ぎ、土産札・神札の購入など、参詣者の対応は多く帳場で行われた²⁴⁾。つまり、入口を備えた勝手に滞在者に応接していた。

3-3. 屋敷と住宅

入口と出口

十二坊の屋敷にはいずれも玄関が設けられていたが、御師の住宅にはない場合もあり、十二坊と御師の社会階級などの差異を反映している。一方で、高尾家・成田家の住宅では共に入口と出口が個別に設けられており、十一坊の屋敷は多く入口のみであるが、八大坊の屋敷は出口もある点で共通する。入る場所と出る場所を明確に区別しており、つまりは人の動きが単一の方向に規定され、動線を効

Tabel 1 The number of visitors at Murayama's house
表 1 村山家に滞在した檀家等の人数

月日 date	6 月 June					7 月 July																		合計 total
	26	27	28	29	30	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	
人数 number of visitors	11	67	81	39	15	40	80	45	60	22	68	29	35	27	4	26	6	24	12	111	45	7	1	855

率的に計画していることになろう。また、入口と出口は土間を介していることや、出口はそのまま敷地の外へと導かれるように置かれることなどが、傾向として指摘できる。

宿泊の機能

御師 of 住宅に要求される機能の一つとして、参詣者が宿泊する場所の提供がある。檀家等を自宅に宿泊させて収入を得ることは、御師の活動を成立させる重要な基盤でもあった²⁵⁾。高尾家や成田家には二階が作られており、宿泊に利用されていたことが想定される²⁶⁾。

十二坊屋敷の中で、檀家を所有していた大覚坊や広徳院の屋敷には二階が存在した。特に、後者では二階部分の指図が残されており、間取り等が知れる。部屋名が記述されておらず用途は不明ながら、宿泊のために利用されていた可能性もあろう。

4. 屋敷と住宅の内部空間構造

近世相模国大山寺の寺内や門前に建てられた十二坊の屋敷や御師の住宅の復元と特徴の分析を目的に、史料の収集・読解・分析を行った。その結果、屋敷や住宅に特徴的な要素と、相互に影響を及ぼしている要素を指摘することができた。

十二坊の屋敷は座敷や勝手など表向きと内向きの部分に区別され、それぞれの内部空間に対応する出入り口が設けられた。護摩などの法要が行われる仏間から玄関までに諸室が接続し、途中には取次の間や溜の間と呼称される部屋もみられる。手前から奥へと明確に空間の階層を設定すると同時に、部屋の構成で進入の経路を規定し動線を操作していた。御師の住宅に用意される勝手は帳場として参詣者を応対する場となり、個別に設けられた入口と出口は円滑な移動が目論まれ効率的である。いずれも短期間に多くの宿泊者が訪れる宿坊であることを反映している。

十二坊の屋敷と御師の住宅は双方に影響を与えていることが想定され、両者の共通点を指摘することができる。例えば、十二坊の屋敷の中には広い勝手や入口と出口が個別に設けられるなど、御師の住宅と同じように参詣者の来訪が考慮されていた。反対に、御師の住宅にも座敷飾りを備えた座敷を最深に幾つかの部屋を接続させて空間に階層がみられ、規模は小さいながらも十二坊の屋敷と同じ特徴を有している。一方で、十二坊の屋敷と御師の住宅の相違点も挙げられる。例えば、十二坊の屋敷では座敷の最奥が仏間となり、仏壇や須弥壇が置かれ、護摩などの祈祷が行われた。一方で、御師の住宅には仏事ではなく神事を行うための施設が備えられ、縁を介して独立した神殿が設けられていた。僧侶と神官という職種の差が屋敷や住宅の設備から読み取ることができ、明確な違いとして現れている²⁷⁾。

以上を要するに、改めて大山寺の寺内や門前にある十二坊の屋敷や御師の住宅は、大山参りという歴史的・社会的な現象を踏まえた建物であることが指摘できる。

注

1) 鈴木章生「相模大山の慶長山内改革について」『立正史学』第 60 号、立正

大学史学会、1986.9、pp.21～35。別当の八大坊だけでなく、供僧として大覚坊・上之院・中之院・常円坊・橋木坊・宝寿院・実城坊・授得院・養智院・広徳院・喜楽坊の十一坊が置かれ、十二坊と総称された（内海弁次『相州大山』、神奈川新聞社、1996.10、pp.223～224）。

2) 『大山史』第 4 編 近古史・第 21 章 實雄法印（石野瑛 編『相模大山縁起及文書』、名著出版、1973.11、pp.55～61）。

3) 御師に関しては、田中宣一「相州大山講の御師と檀家 江戸末期の談廻と夏山登拝をめぐって」（『日本常民文化紀要』第 8 号 II、成城大学大学院文学研究科、1982.3、pp.157～191）などが、檀家に関しては、有賀密夫「大山門前町の研究 門前町の形成と御師の活動と檀家園」（『地域研究』第 14 号、立正地理学会、1971.6、pp.17～28）などがあり、これら二編を含めた大山信仰に関する代表的な論考は、室室文雄 編『民衆宗教史叢書 第 22 卷 大山信仰』（雄山閣出版、1992.8）に編集されている。

4) 『秦野市史民俗調査報告書 3 漂白と定住・御師の村』、秦野市、1984.3、pp.82～124。

5) 松岡俊「相模大山御師の檀家集積過程の構造 村山八太夫直利と八大坊預置檀家を中心として」（『伊勢原の歴史』第 11 号、伊勢原市、1996.3、pp.49～65）では、檀家を「財」と見なしている。財である檀家は、流通・交換・集積などの経済活動を通じて、御師の間を流動したという。また、同「コミュニケーション的行為としての「檀廻」相模大山御師村山八太夫の檀廻を中心として」（『伊勢原の歴史』第 12 号、伊勢原市、1997.3、pp.35～44）でも、御師が檀家を回る「檀廻」に注目し、同様の検討を行っている。

6) 川島敏郎『相州大山信仰の底流 通史・縁起・靈驗譚・旅日記などを介して』、山川出版社、2016.1、p.50。

7) 地域の旧家に伝わる古文書を具体的な調査・研究の対象として、主に以下の史料群を用いる。

「手中家資料」は、大山を拠点に活動した大工棟梁の手中家に伝わる史料群である。原本は、神奈川県立公文書館に寄託されている。史料は整理・分類され、詳細な目録が作成された（『相模国大山大工棟梁手中家資料所在目録稿』、神奈川県教育委員会、1997.3）。明王太郎に関しては、手中正「手中明王太郎と大工文書そして明王太郎敏景」（『伊勢道中日記 旅する大工棟梁』、平凡社、1999.11、pp.123～190）にまとめられている。歴代の棟梁は「明王太郎」を襲名し、由緒は古く近世以前に遡るが、史料からは主に江戸時代の活躍を知ることができる。また、寺内や門前の堂社や住宅の建築も数多く手掛けたようであり、八大坊や十一坊などの屋敷や御師の住宅に関する史料が含まれている。建築を専門にした職人による史料ということもあり、建物の内容を詳細に知ることができる。

「高尾敷家文書」は、大山に居住した御師の高尾家に伝わる史料群である。原本は、かつて当家に所蔵されていたが、その後は所在不明のようである（2009 年現在、伊勢原市からの聞き取りによる）。これまでに伊勢原市が市史編さんの一環として同資料の調査を行っており、史料の複写と目録の作成が行われた。複写物は伊勢原市役所に所蔵され、目録は伊勢原市総務部市史編さん室 編『伊勢原市史資料所在目録 2』（伊勢原市、1988.3）に掲載されている。檀家を書き上げた檀家帳が主な内容であるが、居宅を新築した際の史料も含まれており、御師の住宅に関する情報を得ることができる。

8) 寺院内に営まれる子院の建築に関して、これまでも多くの研究が行われている。例えば、杉山信三『院家建築の研究』（吉川弘文館、1981.9）や川上貢『禪院の建築 禅僧のすまいと祭宇』（河原書店、1968.1）を始め、鈴木嘉吉『古代寺院僧房の研究』（中央公論美術出版、2016.4）や高田良信『法隆寺子院の研究』（同朋舎出版、1981.8）の他に、伊坂道子『芝増上寺境内地の歴史的景観 その建築と都市的空間』（岩田書院、2013.10）などが挙げられる。中でも後者の二書はいずれも寺院組織の役職の差異が建築に反映していることを論じており、近世における子院を考察する上で示唆に富む。特に、増上寺における職掌の一つである坊中の建築は、「客殿（仏間）および庫裏と思われる一対の空間をもつ」（前掲書、p.90）ことや、「敷地の形状や接道位置に合わせて、宿坊のための付加的な座敷、中庭などが連なっている」（同書、p.91）ことなどが特徴として指摘されており、十二坊の建築を理解する上で参考となる点が多い。

- また、大山の御師の住宅に関して、伊勢原市史編集委員会 編『伊勢原市史 民俗調査報告書 3 伊勢原の民俗 大山地区』（伊勢原市、1990.3、pp.114-123）や、小沢朝江・小林純志「相模国大山門前町における御師住宅の平面と変遷 伊勢原市大山門前町の調査研究（2）」（『日本建築学会大会学術講演梗概集』、日本建築学会、2008.7、pp.93～94）などの先行研究がある。更に、他の地域の御師の住宅に関して、例えば伊勢や富士を対象とした先行研究がある。特に、外川家住宅学術調査会・富士吉田市歴史民俗博物館 編『富士山吉田口御師の住まいと暮らし 外川家住宅学術調査報告書』（富士吉田市教育委員会、2008.3）では詳細な報告と論考が収められており、御師の住宅の平面構成を都市の構造や地割との関係から堅家と横家の差異で把握し、祭祀空間を中心とする座敷の構成が定型化した上で玄関から御前・御神殿までの軸線が確立することなどを明らかにしている（同書、pp.128～136）。
- 9) 御師の住宅を考察する上で、「取次間」は主要な研究課題の一つである（松岡俊「相模大山寺の「取次」制度の構造 媒介する宗教者の取次をめぐる」『秦野市史研究』第16号、秦野市、1996.3、pp.23～42）。「取次間」が注目されたのは、大山には「取次」という制度が存在するためである。大山は近世初頭に結界がはられ、山上は聖域と定められたために、修験者は御師となって門前町に居住するようになったという経緯がある。御師は大山寺と檀家の中間に位置し、両者を結び役割を担うようになる。この仕組みが制度化されたのが「取次」であり、「取次間」も単に人と人との間を仲介するという一般的な意味ではなく、大山に固有の制度を反映した名称であり用途であって、御師の機能を象徴する空間であることが指摘された。
- 10) 1－A：「八大坊様上寺地割控メ百十四坪」（手中家資料〈3924〉）。
1－B：「八大坊様上屋敷敷地割」（手中家資料〈2942〉）。
2－A：「大山寺大覚坊普請注文書（絵図とも）」（手中家資料〈3250〉）。同史料は、伊勢原市史編集委員会 編『伊勢原市史 資料編続大山』（伊勢原市、1994.3、pp.113～123）に翻刻されている。
2－B：「大山寺大覚坊様御客殿地割」（手中家資料〈684〉）。
2－C：「大山大覚坊様御客殿地割」（手中家資料〈682〉）。
2－D：「大山寺大覚坊様地割」（手中家資料〈2958〉）。
3－A：「照海様代中之院様地割図」（手中家資料〈634〉）。
3－B：「大山寺中之院様客殿地割」（手中家資料〈690〉）。
3－C：「中之院様地絵図扣」（手中家資料〈3270〉）。
4：「（元大山寺常門坊勝手平面図）」（手中家資料〈2967〉）。
5：「元大山寺授得院勝手」（手中家資料〈801〉）。
6：「広徳院様庫裡裏 御住居絵図」（手中家資料〈3925〉）。
7－A：「家作仕様積立帳」（高尾家資料〈49〉）。
7－B：「家作仕様積立帳」（高尾家資料〈51〉）。同史料は、伊勢原市史編集委員会 編『伊勢原市史 資料編続大山』（伊勢原市、1994.3、pp.98～100）に翻刻されている。
8：「出火万控」（手中家資料〈591〉）。同史料は、伊勢原市史編集委員会 編『伊勢原市史 資料編続大山』（伊勢原市、1994.3、pp.432～473）に翻刻されている。
- 各指図におけるグレー部分は朱書きを示す。なお、同時期に多数の指図が作成されたのは、安政元年（1854）の火災で多くの堂舎・住宅が焼失し、再建が計画されたためである。一方で、復興は容易でなく、数年の歳月が掛かり、そのまま明治維新を迎えることとなる（内海弁次『相州大山』、神奈川新聞社、1996.10、pp.238～239）。
- 11) 寺院内のいわゆる子院の建築における堂と庫裏に当てはめて理解することができる（高田良信『法隆寺子院の研究』、同朋舎出版、1981.8、p.26）。
- 12) 中間に位置する出入り口として、八大坊では「内玄関」が、大覚坊では「小玄関」が、中之院では「中庭入口」が、それぞれ該当する。例えば、「内玄関」が表向きではない内向きのための玄関（内向きの空間に通じる）であり、「小玄関」が正式ではない略式の玄関（表向きの空間に通じる）である、という一般的な理解に加えて、どちらの空間へも通じ得る中間的な領域と位置付けている。
- 13) 武州山崎村（埼玉県深谷市山崎）からの参詣者である長治郎は、上屋敷にて護摩の法要を受けたのちに宿坊へ立ち寄っている（伊勢原市史編集委員会 編『伊勢原市史 資料編続大山』、伊勢原市、1994.3、p.334）。
- 14) 松岡俊「相模大山寺の「取次」制度の構造 媒介する宗教者の取次をめぐる」（『秦野市史研究』第16号、秦野市、1996.3、p.30）では、「ここ（引用者注：ここは「取次間」やそれに類する部屋）に先ず案内された後に一連の行事が進行していた」と位置付けられており、聖域と俗域や寺院と檀家を媒介するための空間が必要であったことを指摘している。
- 15) 江戸城には「溜間」があるものの、将軍の側近が詰める部屋として利用され、用途は異なる（松尾美恵子「大名の殿席と家格」『徳川林政史研究所 研究

- 紀要 昭和55年度』、徳川黎明会、1981.3、pp.301～328）。
- 16) 例えば、檀家を迎える重要な接待の空間として茶の間を位置付けることもできよう。
- 17) 大山寺が幕府から朱印を授与される一件で、供僧の十一坊や目代・目付・名主などの役人が八大坊の上屋敷に集合するに際し、居間が使われている（伊勢原市史編集委員会 編『伊勢原市史 資料編続大山』、伊勢原市、1994.3、p.634）。
- 18) 天明6年（1786）に作成された「大山寺社稷丸裸」より、八大坊・大覚坊・喜楽坊・広徳院・宝寿院・中之院のそれぞれが檀家を所有していたことが分かる（伊勢原市史編集委員会 編『伊勢原市史 資料編続大山』、伊勢原市、1994.3、p.86）。
- 19) 指図「3－A」では「小玄関」が用意されているものの、指図「3－B」では撤去されている。つまり、「小玄関」が担っていた機能は、他の装置が代替することになる。その一つに「中庭入口」が見込まれ、檀家の出入り口としての機能を果たし得たと考えられる。
- 20) 伊勢原市史編集委員会 編『伊勢原市史 民俗調査報告書 3 伊勢原の民俗 大山地区』（伊勢原市、1990.3、p.121）には、昭和63年（1988）度に行われた大山地区の建物調査の結果報告が、調査員の新井清により行われており、「一般民家との相違点として、まず第一に神殿があることであろう。この神殿には大山阿夫利神社の分霊をお祀りしている。先導師（引用者注：御師のこと。明治維新後、御師は先導師となる）は神官であり、自宅に神殿を造り祀っている。そして阿夫利神社の神徳を多くの人々に知らせ、信仰を進めるのが大きな目的である神殿の位置は大きく二つに分けられる。その一は、ゲンカンを入った正面奥に祀られている例は、C、E、D（引用者注：調査は五棟の先導師の建物が選定されて行われ、それぞれにA・B・C・D・Eの記号が振られた）の各家で、そのうちD家では現在では二階に移してあるが、元の位置に戻すこの類になる。これは講社の人達が参拝のため訪れた時、先づ神殿へ拝礼をするに良い位置である。また阿夫利神社の大祭中は、ゲンカンへ仮の祭殿を設け、神を祀ることが行われている」として、当時において神殿は玄関に置かれたという。また、小沢朝江・小林純志「相模国大山門前町における御師住宅の平面と変遷 伊勢原市大山門前町の調査研究（2）」（『日本建築学会大会学術講演梗概集』、日本建築学会、2008.7、pp.93～94）でも、「神殿は、（中略）入口正面の部屋に置き」と同様の指摘がある。一方で、高尾家に玄関はなく、成田家も神殿を設置する場所が玄関にはみられない。
- 21) 「家作仕様積立帳」（高尾家資料〈51〉）。
- 22) 伊勢原市史編集委員会 編『伊勢原市史 資料編続大山』、伊勢原市、1994.3、pp.323～367。
- 23) 例えば、主人の役割として「御着挨拶、坊入記録、講中札包、食事挨拶」が、手代の役割として「御着受付、荷物札付、履物札付、姓名記帳、諸祈願受付、御立ノ節着札渡、諸事氣ヲ付ベシ」が、それぞれ列記されている（伊勢原市史編集委員会 編『伊勢原市史 資料編続大山』、伊勢原市、1994.3、pp.819～820）。
- 24) 参詣者への案内である「大祭中座敷張札扣」には、「坊入御札料其他、総て金銭ハ直接二帳場へ御持参被下度候也」や「御本社ノ御祈禱御願ヒノ方ハ帳場へ御申込可被下、願書認メ御取次申候也」と記されていた（伊勢原市史編集委員会 編『伊勢原市史 資料編続大山』、伊勢原市、1994.3、p.823）。
- 25) 大山の麓に位置する子易村で旅人を宿泊させることに対して、御師が訴訟を起こしている（伊勢原市史編集委員会 編『伊勢原市史 資料編近世1』、伊勢原市、1992.3、pp.492-495）。
- 26) 二階に「客用の宿泊室」を用意することが一般的であったようである（伊勢原市史編集委員会 編『伊勢原市史 民俗調査報告書 3 伊勢原の民俗 大山地区』（伊勢原市、1990.3、p.121）。
- 27) なお、十二坊の中でも別当である八大坊と他の供僧である十一坊の屋敷では、寺院組織内の身分の差を反映した違いが想定される。例えば、八大坊の屋敷にみられる車寄せや唐破風は比較的に大きく描かれ、或いは十一坊の屋敷にのみ表向きの空間に茶の間が設けられるなど、指摘し得る点はあるものの断言するにはなお史料が不足しており、付記するととどめる。
- 28) These plans written by Japanese because of the old documents traced.

図版出典

図1：内海弁次『相州大山』、神奈川新聞社、1996.10

図2～13、16：手中家資料より著者作成

図14・15：高尾家資料より著者作成

付記

・本稿は、JSPS 科研費（課題番号：17K14796）による研究成果の一部である。

EARLY-MODERN ARCHITECTURE FOR JUNI-BO AND OSHI IN OYAMA-DERA TEMPLE OF SAGAMI-NO-KUNI PROVINCE

Yoshihiro YAMAGISHI^{*1}

^{*1} Assist. Prof., College of Engineering, Nihon Univ., Dr.Arch.

Mt. Oyama, also called Afuri-yama (rainfall mountain), is located at the east end of Tanzawa-sanchi mountains in the central west part of Kanagawa prefecture. The foundation and origin of the temple and shrine can be traced back as far as ancient times. In the early-modern times, the temple was revived under the patronage of the Tokugawa government so that a management organization was formed for autonomy, composed of Hachidai-bo (eight great monks) and Juni-bo (twelve branch temples). At the same time, Mt. Oyama was determined as a sacred precinct, so Shugenja (mountain ascetics) had to leave the temple to be "Oshi (priests)" and lived along the approach to the temple forming a Monzen-machi (temple town). The precinct and the temple town developed with the series of Tokugawa Ieyasu's "Sannai-kaikaku (precinct reformation)" until the end of Edo period. The greatest feature of Mt. Oyama in the Edo period was that "Oyama-mairi (visiting Oyama)" by Oshi and Danka (patron household) won popularity throughout the Kanto region. At its peak, around a million of people were said to believe in the mountain, organizing Ko (associations) in different parts of the region to make vicarious visits to the temple. They were called "Danka (patron household)" and traveled to the temple with the guidance of a specific Oshi. In addition to providing lodging, visiting Danka's houses that were scattered throughout the Kanto region one by one to offer Ofuda (talismans) and prayers was Oshi's another function. They developed routes that connect different areas with Oyama, and stayed at a specific Danka's house to make their round. In this way, both Oshi and Danka traveled over a wide area to make a dynamic social structure function. Oshi acted as an intermediary between the temple and the Danka. They served under the Oyama-dera temple and located between the sacred precinct and the secular society.

This paper aimed to recover the outline and analyze the characteristics of the mansions of Juni-bo (twelve branch temples) in Oyama-dera temple precinct and the houses of Oshi in its temple town by collecting and comprehending relative historical materials. It focused on the second half of the Edo period, when "Oyama-mairi (visiting Oyama)" became prosperous, through the end of Edo and the beginning of Meiji periods to give a consideration from the perspective of architectural history.

Consequently, it was indicated that the mansions and the houses had their own characteristics along with interactive elements. The Juni-bo mansions were divided into outward and inward parts. A midway area was also recognized. Three doorways of the front, side, and service entrances reflected the existence of each interior space. Several rooms joined the Butsuma (altar room), where Buddhist services were practiced, to the front entrance, and a Tamari-no-ma (anteroom) was also laid out in between. Spatial hierarchy was thus clearly set from the front to the back, and the configuration of the rooms regulated the approach route to control the path of flow. On the other hand, Oshi's houses contained a large kitchen space as an office to deal with pilgrims, and the entrance and exit were separated to ensure smooth and effective flow. Each function reflected the fact that the buildings were Shuku-bo (pilgrims' lodgings) that accommodated many visitors in a short period of time. At the same time, the Juni-bo mansions also had a large kitchen space and separate entrance and exit, taking pilgrims visit into account. Likewise, Oshi's houses also had a Zashiki (tatami room) at their innermost with several rooms joined to produce spatial hierarchy. Thus it can be said that the elements of the mansions and the houses interacted each other.

(2017 年 6 月 10 日原稿受理, 2017 年 11 月 21 日採用決定)